

# 鹿児島県柔道会だより

■発行人/北 哲郎 ■編集/総務部編集委員会 ■発行/財団法人鹿児島県柔道会 (電話 099-222-7770)

## 薩摩の郷中教育と柔道

会長 北 哲 郎



《巻頭言》

(講道館発行「柔道」8月号より転載)

はじめに

講道館柔道が創始されて、今年で125年目を迎える。その間、世界中に普及、発展し、現在では、国際柔道連盟に195ヵ国が加盟しています。

柔道がこれほどまでに発展したのは、嘉納師範の柔道に「一本で決める」という気魄と技の魅力、そして、勝ってもおごらず、負けても挫けず、常に相手を尊重し、敬意を表する「武道精神」があったからだと思います。

江戸時代、薩摩藩には「人をもって城となす」という伝統的な考え方や郷中教育という独得の青少年教育のしくみがありました。この郷中教育の伝統に培われた薩摩の質実剛健の気風と、明治15年に創始された講道館柔道の理念とが相俟って、「鹿児島の柔道」が発展してきたものと思われま

す。いま、本県でも、ものの豊かさの中で意志の弱い、物事に耐えることのできない青少年の増加が憂慮されています。

このような時代だからこそ、節度ある人間形成に貢献している講道館柔道の普及振興が必要であり、薩摩が育んだ郷中教育の良さを見直し、取り入れていくべきであると考えています。

では、薩摩の気風、風土は如何に形成されたのか、郷中教育の歴史と実践内容をひもといてみたいと思います。

### 1 郷中教育

郷中教育は、秀吉の朝鮮の役に源を発し、江戸時代250年の間に、次第に体系を整えていったものですが、その基本的特徴は、「師弟同行」といわれる異年齢集団の中での青少年の自治的な相互教育という点にあります。

それは明治維新による幕藩体制の崩壊と共に一時中断されていましたが、明治10年に至って新しい装いを凝らした「学舎教育」に継承され、学校教育の外で、青少年の人間形成のための自主的な教育機関として機能していきました。

「郷中」とは、地域の結社で、薩摩の青少年は年齢別に小稚児(現在の小学生に該当する年齢)、長稚児(現在の中学生)、二才(高校生)、長老(大学生)に分けられ、武道・学習はもちろん、生活全般にわたり、集団的活動を営んでいました。

その集団内での人間的な触れ合いを通して、自治団体における秩序の形成や、強者(年長者)の弱者(年少者)に対する思いやり、相互扶助・友情・連帯感・耐性・リーダーシップなどきわめて多くの資質をはぐくみ育てました。それらは年齢の差に基づく知識経験の差や肉体的強弱の差、人間的な成熟度の差が教育的に作用することによって、より有効に育成されたと考えます。

負けるな。うそを言うな。弱いものをいじめるな。という薩摩三訓を根気強く教えつづけ、遂に薩摩人気が形成されたものと思います。明治維新の立役者となった西郷隆盛や大久保利通なども、この郷中教育から生まれて来たのであります。

### 2 日新公いろは歌

このいろは歌は、日新齋忠良の作であります。戦国の世に英明の武将と称えられた島津忠良(日新公)は、神仏の崇敬厚く、また桂庵禅師の教えを継ぐ朱子学を学び、自ら「在家菩薩」と称しました。忠良は、武士として人間としての道、仏教、神学、儒学などの教え

をもとに、四十七首の和歌にまとめました。この「日新公いろは歌」は、藩政や士民の教育の指針となり広く愛誦されました。

薩摩藩では、役人の心得としても尊重され藩庁の家老座の床の間には、次の三首が掲げられて、役人たちは登庁するとまず、この三首を拝吟してから、職務に取り掛かったといひます。

古の道<sup>いしな</sup>を聞<sup>き</sup>ても唱<sup>とな</sup>ても

我<sup>わが</sup>をこなひにせずばかひなし  
とがありて人をきるとも軽くすな

いかすかたなもただひとつなり  
もろもろの国やところの政道は

人にまずよくをしえならはせ

また、郷中教育でも尊重されて、二才稚児たちは、忠良公のいろは歌を暗唱したといひます。

### 3 出水兵児修養之掟

出水郷三代地頭山田昌巖の作と伝えられています。ほんどうの武士は、自己にきびしく、誠実に、美しく生きよ、と教えています。

出水の各郷中では、このような青少年の生活規範になる「掟」を作って座右の銘とし、朝夕朗読させました。この教えは、現代の私達に、人間の生き方を考えさせてくれる味わい深いことばであります。

#### 原文

士ハ節義ヲ嗜ミ申スベク候。節義ノ嗜ミト申スモノハ、口ニ偽ヲ言ハズ、身ニ私ヲ構ヘズ、心直ニシテ作法乱レズ、礼儀正シク上ニヘツラワズ、下ヲアナドラズ、人ノ患難ヲ見捨テズ、己ガ約諾ヲ違ヘズ、甲斐々々シク頼母シク、苟ニモ下様ノ賤シキ物語リ悪口ナド話ノ端ニモ出サズ、譬ヘ恥ヲ知りテ首刎ラルルトモ己ガナスマジキ事ヲセズ、死スベキ場ヲ一足モ引カズ、其心鉄石ノ如ク、又温和慈愛ニシテ物ノ哀レヲ知り、人ニ情アルヲ以テ節義ノ嗜ミト申スモノナリ。

#### むすび

嘉納治五郎師範の柔道は「柔道を通して心身を鍛錬し、己を完成し、世を補益する」即ち「人づくり」を目的として教育し、幾多の人材を輩出して来ました。郷中教育の目標と講道館柔道に相通ずるものを感じ欣快の至りであります。

郷土に伝わる教育の伝統を生かしながら、今後は、日本伝統の講道館柔道の原点に立ち返り、微力を尽くし、前述の理念確立に邁進する決意です。

## ○ 社会体育功労賞に三氏

この体育功労賞は、長年にわたり鹿児島県のスポーツ振興ならびに地域の社会体育の普及に多大の成果をあげた個人を、鹿児島県体育協会が表彰するものでこの栄えある賞を次の三氏が受賞。

表彰式は、県民体育大会初日の16日(土)、薩摩川内市総合運動公園陸上競技場の開会式で行われた。

○ 和田茂市氏(60歳)

(財)鹿児島県柔道会評議員、県柔道会推薦

○ 徳永正明氏(55歳)

(財)鹿児島県柔道会常務理事、県柔道会推薦

○ 平善行氏(55歳)

薩摩川内市柔道会理事長、地区体協推薦

なお、スポーツ少年団顕彰に、次の二氏

○ 飛松義忠氏(志布志柔道少年団)

日本スポーツ少年団顕彰

○ 柏木茂穂氏(正道館柔道少年団)

鹿児島県スポーツ少年団顕彰

### 柔道ルネッサンスキャッチフレーズ 入賞作品

礼節を重んじマナーの良い柔道愛好家を一人も多く輩出するために、「友情・夢・挑戦・敬愛・礼節」をテーマとして、中学生を対象にキャッチフレーズの公募があり、全国から937件の応募、本県から応募した下記の作品が入選し表彰された。

### 「きたえよう 心と体を 柔道で」

下山勝栄(南さつま市立坊泊中学校2年生)

## ○ 平成18年度Bライセンス合格者

迫良平(日置市役所勤務)

西淳一(松元中学校勤務)

長倉大輝(県警機動隊勤務)

平成18年度 鹿児島県全体登録状況

2006年 9月 5日(火) 現在

(1) 登録団体・登録者数

	登録団体数	登録者数		合計
		男	女	
鹿児島県警		168		168
一般	14	129	5	134
大学		101	23	124
高等学校	74	431	100	531
中学校	58	676	151	827
スポーツ少年団	42	486	140	626
未就学児		(18)	(3)	(21)
合計		1991	419	2410

(2) 指導者登録数

	男	女	合計
鹿児島県警	63		63
一般	257	1	258
大学	6		6
高等学校	74	2	76
中学校	74	6	80
スポーツ少年団	56	3	59
合計	530	12	542

2952名

(3) ライセンス

	随時更新 ライセンス	Aライセンス			Bライセンス			Cライセンス		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
鹿児島県警		4		4	18		18	14		14
一般					17		17	44		44
大学	1	1		1	1		1			
高等学校	1	1		1	14		14	26		26
中学校					6	1	7	13	2	15
スポーツ少年団					1		1	15		15
合計	2	6		6	57	1	58	112	2	114

○ 2006年度の県内の登録者状況がまとまりましたのでお知らせします。9月5日(火)現在のものです。昨年度の同時期に比較して100人ほど減少しておりますが、年度内には昨年並みもしくはそれに上乗せできる数字に持っていけたらと切望しています。

○ 登録につきましては各支部の先生方には一方ならぬご苦勞をおかけております。心から感謝とお礼を申し上げます。お蔭様で鹿児島県は全国でも上位にランクされておりますが、高段者の指導者登録が少なく、本部でも毎年高段者の掘り起こしを行っております。良い知恵と力をお貸しください。

## 《試合報告》 6～9月

## ○ 九州ジュニア体重別選手権大会

田中・梶屋で決勝戦、男子100kg超級

## ◇ 男子60kg級

2位 東恩納玄(鹿屋体育大学)

## ◇ 男子66kg級

2位 山田琢己(鹿児島商業高等学校)

## ◇ 男子100kg超級

1位 田中 亮(鹿児島工業高等学校)

2位 梶屋祐太(中種子高等学校)

九州ジュニア体重別柔道選手権大会は、7月9日(日)宮崎県武道館で開催され、本県からは、男子14名(各階級2名)、女子21名(各階級3名)が、全日本ジュニアへの出場を目指して健闘、4名の選手が出場権を獲得した。

中でも100kg超級の決勝は、本県同士、高校生同士の決勝で、県予選の再現となったが、田中が梶屋を僅差で退けて優勝した。

## ○ 全日本ジュニア体重別選手権大会

全日本ジュニア体重別選手権は、9月9日埼玉県武道館で行われ、本県より4名の選手が九州代表で参加し善戦したが入賞には届かなかった。

## ○ 第1回県下小学生学年別柔道大会

6月17日(土)：鹿児島アリーナ

全国小学生学年別柔道大会(5・6年生男女別、体重別)の予選会を過去2回実施してきたが、第3回となる今年度から鹿児島県小学生柔道大会として昇格させ、4年生も加えてその第1回大会を鹿児島アリーナ武道場で行った。本大会は5・6年生のみの大会となるため、4年生を除く5・6年生各階級の優勝者8名は、8月19・20日に富山県小杉市で行われる全国大会に出場する。

## 《男子個人戦》

## ◇ 4年生35kg

1位 栄 翔太(宇検柔道スポーツ少年団)

## ◇ 4年生35kg超級

1位 中西将太(末吉柔道スポーツ少年団)

## ◇ 5年生40kg級

1位 富永健斗(末吉柔道スポーツ少年団)

## ◇ 5年生40kg超級

1位 上野公大(三笠柔道スポーツ少年団)

## ◇ 6年生45kg級

1位 大山陣矢(米倉柔道館)

## ◇ 6年生45kg超級

1位 花田健悟(三笠柔道スポーツ少年団)

## 《女子個人戦》

## ◆ 4年生35kg級

1位 前田千島(志布志柔道スポーツ少年団)

## ◆ 4年生35kg超級

1位 山下理奈(南界柔道スポーツ少年団)

## ◆ 5年生40kg級

1位 永田ひかり(正道館)

## ◆ 5年生40kg超級

1位 湯之上歩惟(山川武道館柔道スポーツ少年団)

## ◆ 6年生45kg級

1位 入来成美(柔心館道場)

## ◆ 6年生45kg超級

1位 高山莉加(柔心館道場)

## 第56回全九州高等学校柔道大会

6月17(土)・18(日)：熊本県山鹿市総合体育館で開催され、本県高校生が活躍した。結果は以下のとおり。

◎ 男子団体 3位 甲陵高等学校

## ○ 男子個人

◇ 66kg級 2位 豎山剛(鹿児島商業高校)

◇ 73kg級 3位 池田敬介(甲陵高校)

◇ 81kg級 3位 大王貴広(鹿児島商業高校)

◇ 90kg級 3位 中村宏也(甲陵高校)

◇ 100kg超級 2位 梶屋祐太(中種子高校)

3位 田中亮(鹿児島工業高校)

## ○ 女子個人

◆ 48kg級 2位 豎山優(鹿児島南高校)

## ○ 九州中学総体 8月11・12日

九電記念体育館

## ● 女子団体 榕城中学校 第2位

## ◇ 男子個人戦

- 60kg級 1位 池田 宏次郎(財部中学校)  
 66kg級 1位 長谷川 大樹(財部中学校)  
 73kg級 2位 山田 泰裕(第一鹿屋中学校)  
 81kg級 3位 内村 拓瑠(鹿屋東中学校)  
 90kg級 2位 児玉 裕世(阿久根中学校)  
 90kg超 2位 土屋 潤(伊集院中学校)

## ◆ 女子個人戦

- 44kg級 2位 瀬戸口 彩(川内中央中学校)  
 48kg級 1位 大木 千佳(山川中学校)  
 57kg級 2位 古賀 ちなつ(山川中学校)  
 70kg超 1位 烏帽子 美久(榕城中学校)

個人戦において、鹿児島県勢は、男子7階級、女子7階級、計14階級中10階級において入賞、4階級で優勝を飾る大活躍だった。

## ○ 全国中学総体 8月19～22日

高知・南国スポーツセンター

女子70kg超級で烏帽子美久選手(榕城)が2位に入賞したほか、44kg級瀬戸口彩(川内中央)、48kg級の太木千佳(山川)、男子73kg級の山田泰裕(第一鹿屋)、90kg超級の土屋潤(伊集院)の4選手がベスト8まで駒を進めた。このところ、中学選手の九州・全国での活躍は特筆すべきものがあり、指導者・選手が一丸となった強化策が実を結んだといえよう。

## ○ 少年男・女、アベック出場

8月20日(日)、熊本県山鹿市の総合体育館で行われた九州国体において、本県の少年男子、少年女子が出場権を獲得、10月6日から兵庫県で開催される第61回国民体育大会柔道競技へ、成年男子とともに出場することが決定した。少男・少女が揃って本国体に出場するのは、初めてのことである。

## ○ 第60回県民体育大会中止

9月16日(土)、薩摩川内市の総合運動公園陸上競技場において、第60回県民体育大会の開会式は開催され、各競技順調に第1日目のスタートを切ったが、2日目になり台風13号が急接近するに至り、17日(日)に予定されたいた種目はすべて中止のやむなきに至る。県協の発表によると、60回を迎える長い歴史の中でも初めてのことらしい。

この日のために、県下各地区の役員、監督、選手団すべてが現地入りしていただだけに、突然中止の報せに一样に参加者たちは驚きと戸惑いを隠せぬ様子だった。それでも、大自然の力にはどう抵抗する術もなくそれぞれの地区へと帰りを急ぐ姿が見られた。

肝属県体から1年、薩摩川内市の行政、地域社会や各競技団体、学校までもひっくるめた組織づくりや強化策など、並大抵のことではなかったと思う。

薩摩川内市のすべての皆さん、薩摩川内市の柔道関係者の皆さんに、心からお礼の言葉と遺憾の意を表したいと思います。本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

## ○ これからの大会予定(10～2月)

- 10月22日 妙園寺詣り柔道大会  
 10月24・25日 第54回県下高校新人柔道大会  
 11月11日 第33回県下少年柔道大会  
 12月24日 県スポーツ少年団競技別大会  
 1月20日 第47回高等学校柔道選手権大会  
 2月4日 県柔道・県女子柔道選手権大会  
 2月18日 第31回県下中学校柔道新人大会  
 2月25日 第24回県下少年柔道新人大会

ホームページアドレス(小文字)

<http://kagoshima-judokai.com>

Eメールアドレス(小文字)

[kagoshima-judokai@y2.dion.ne.jp](mailto:kagoshima-judokai@y2.dion.ne.jp)

※ 行事予定・大会要項・申込書等ダウンロードされ活用ください。また、ご意見などお寄せください。

- 全日本少年武道(柔道)錬成大会の開催  
期日：平成18年8月28日(月)～30日(水)  
場所：鹿児島アリーナ武道場

## ○ 中央講師

大原 尚 喜 五段

(財)全日本柔道連盟・横浜市立戸塚高校

・世界学生柔道選手権優勝 等

緒方 康 成 五段

(財)全日本柔道連盟・兵庫県警察学校柔道教師

・全国警察柔道選手権大会優勝 等

小室 宏 二 五段

(財)全日本柔道連盟・講道館道場指導部

・ハンガリー国際柔道大会優勝 等

・DVD「ザ・コムロック柔道実践的寝技」出版

## ○ 地元講師

稲田 博 実 六段

(財)鹿児島県柔道会理事・県立鹿児島工業高校

・全国高校総体優勝 等

田原 幸 一 五段

(財)鹿児島県柔道会評議員・中体連専門委員長

鹿児島市立伊敷中学校

・全日本学生体重別選手権出場 等

この錬成大会は、日本武道館等が主催して行う事業で、鹿児島市で開催されたのは10数年振りのことで、連日150名を超える参加者で大盛況であった。

## 人物紹介① 徳 三 宝

—講道館入門まで—

私の手元に鹿児島県教育委員会の郷土教育の一環として、伊仙町立犬田布中学校が製作した「日本の柔道家になるんだ」(徳三宝)という古びた資料がある。中学校の道德教育で徳三宝を教えようというものがあるが、この徳三宝でねらう道德的価値は「自主性・自主自立」であり、学習指導要領の内容4というのに相当し、中学2年生の教材として位置付けられている。昭和59(1984)年のことである。

徳三宝は、明治20(1887)年大島郡天城町に生まれた。少年時代から体格が大きく、体力・気力・腕力とにもずば抜けていたという。

中学校は、鹿児島一中(いまの鶴丸高校)説と鹿児島二中(いまの甲南高校)説が半々である。当時、鹿児島中学校には本校と分校があり三宝は分校に入学した。そして途中からそれぞれが独立し、本校が一中となり、分校が二中となったので近来では二中説有利だが、この道德教育の資料では一中説を支持している。

中学校に進んだ三宝は、第七高等学校(いまの鹿児島大学)柔道師範の佐村嘉一郎(のちの十段)に見出されて、徹底的にきたえられメキメキと腕を上げる。気絶するくらいに投げられる毎日だったという。

明治38(1905)年、三宝は、全九州中学校柔道大会で優勝し無敵を誇った。高校生でもう三宝の右に出る者はいなかった。少々慢心したところもあったかもしれない。納屋通りでは魚屋の店員数名と西田橋では、船の物の上げ下ろしをする荒くれ男7～8名と乱闘を演じて、警察まで出動し新聞にまで報じられて一躍名を馳せた。このことが問題になり中学校を退学処分になる。

佐村師範の案内状を持って上京。講道館への入門を決意する。

嘉納治五郎師範は、中学校を中退のままではいけないと自らが校長を務める東京神田の錦城中学校の4年生の編入試験を受けさせた。三宝は、この名門校の編入試験に見事合格した。明治39年、19歳のときのことである。

大きな頭にチョココンと小さい帽子をのせ、図体の大きい中学生が臍の見えるほど短い上着を着て通学したので、たちまち、神田界隈の名物男になったという。

そのころ、錦城中学校は柔道の名門校として全国にての名は鳴り響いていた。明治大学、中央大学、日本大学などに練習に行き大学生が舌を巻くくらいの猛者が揃っていたという。

上京した翌年の4月、三宝は、講道館の紅白試合で12名を形のような体落して投げ飛ばし即日初段を許され、憧れの黒帯を手にしたのである。(文責 木原紀幸)

## 編集後記

第5号を発行する運びとなりました。今回は、講道館発行の雑誌「柔道」8月号に掲載されました会長の巻頭言を転載しました。郷土薩摩の教育と講道館柔道の目指す人間教育、その帰結点は同じであると説く名文です。少年諸君にも読んで頂きたい。(副会長兼総務部長木原)